０．オリエンテーション	4/11
１．「解放の神学」系とは何か	4/18
２．拡張された自然神学と社会科学	4/25
３．解放の神学と宗教社会主義論	5/9
４．フェミニスト神学	5/16
５．黒人神学	5/23
６．アジアの解放の神学	5/30
７．アフリカ神学の動向	6/6
８．政治神学の現在	6/13
９．宗教的寛容論	6/20
10．民主主義とキリスト教	6/27
11．戦争論と平和論	7/4
12．経済の神学	7/11
13．経済と環境	7/18
14．経済と政治	（7/25）
15．フィードバック	

＜授業の概要・目的＞

現代世界において宗教は、深刻な対立要因の一つと見なされている。この対立図式自体の問題性は別にしても、キリスト教がこうした文脈で問われていることは否定できない。本講義では、こうしたキリスト教思想を取り巻く思想状況を念頭に置きながら、キリスト教思想の新なる展開の可能性について議論を行いたい。

そのために本講義では、キリスト教思想とその宗教哲学的基盤の探求というアプローチが試みられる。キリスト教思想の新たなる展開には、こうした根本からの議論の組み立てが要求されるからである。2017年度前期は、現代キリスト教思想における「解放の神学」系の諸動向を参照しつつ、宗教哲学の現代的課題について考える。

＜成績評価＞レポートによる。

＜受講の注意事項＞

・受講生には、講義内容を理解するために必要な復習を行うのはもちろんのこととして、各自の研究テーマとの関係づけを行うための発展的な学習が求められる。必要に応じて講義担当教員との研究相談を行うことが望ましい。

・質問は、オフィスアワー（火３・木３）を利用するか、メール（授業にて、指示）で行うこと。

＜導入・昨年度講義から＞

「現代日本における宗教哲学の構築をめざして」（キリスト教学専修『キリスト教学研究室紀要』５号、2017年3月）

一　はじめに

・・・

おそらく、現代の思想状況において宗教哲学が困難な理由については、次の三つの観点を区別しつつ、論じることが必要であろう。すなわち、宗教に関わる理由、哲学をめぐる理由、そして宗教哲学として宗教と哲学の結びつきに関連した理由である。

まず、宗教哲学が現代において困難である理由としては、近代以降に宗教を取り巻く状況が大きく変化し、そのために、宗教に積極的な意義を認める仕方での思想展開が停滞したことが挙げられるであろう。18 世紀に近代的な社会システムが本格的に動き始めるとともに、宗教はしだいに公的領域から私的領域へと移行して行く――政教分離と宗教の私事化――。このいわゆる社会の世俗化の中で、西洋の諸伝統を再編する哲学的試みとしてドイツの古典的な哲学思想が展開され、その中で宗教を再考する議論が一時活発に行われた――カントからドイツ観念論にかけて――。しかし、19 世紀中頃には宗教に対するさまざまな懐疑論や否定論（無神論、宗教批判）が思想の大きな潮流を形成してゆき、宗教を積極的な仕方でテーマ化する哲学的思索としての宗教哲学は思想的な傍流へと押しやられることになる。現代の思想状況も、基本的にはこの社会の世俗化と宗教の私事化によって規定されており、これが宗教哲学を困難なものとしているのである。

この宗教を取り巻く状況の変化は、学としての宗教哲学を含む哲学自体の変化をも引き起こし、この哲学の変化が、さらに宗教哲学の展開を困難なものにした。すなわち、啓蒙主義の思想状況がもたらした実証主義的な近代科学の理念が、(3) しだいに近代的知のモデルとして機能することになり、哲学的思惟もそれに大きく規定されるようになる。つまり、自然主義と歴史主義という 19 世紀の諸学問を特徴付ける思惟に即応した哲学、(4) つまり実証主義的哲学の台頭である。これは、超越や神概念を視野に入れたカントやドイツ観念論の哲学的思惟とは異なる、いわば「別の思惟」へ移行であり、宗教思想と内的にかみ合う形での宗教哲学は、その哲学的基盤を大幅に喪失することになった。

こうした宗教と哲学を巻き込んだ近代以降の状況の変化（知的世界の構造転換）は、宗教哲学を支える哲学と宗教の関係項（＝「と」）においても変化をもたらすことになる。古代ギリシャ以来、宗教をめぐる哲学的思惟を動かしてきた関係項としての「と」はその内実を変化させつつも、近代に至るまで、そしておそらくは現代も、存続し続けており、それが宗教哲学を可能にしてきた。しかし、この関係項は、宗教と哲学双方の変化の中で、しだいにやせ細り、宗教哲学を支えることがきわめて困難になっている。こうして、今や現代は宗教哲学の貧困な時代となっているのである。(5)

以上が、現代において、そして現代日本において、宗教哲学の構築が困難であることの理由の一端であるが、しかし現在、知的世界の状況は、さらなる転換を予感させてはいないだろうか――いわゆるポスト近代の思想状況である (6) ――。この予感が正しいとすれば、宗教哲学の貧困な時代にも、なおも新しい可能性が見出しうるかもしれない。これが、現代日本において宗教哲学の構築をめざす根拠にほかならない。しかし、この課題を遂行するには多くの思索を積み重ねる必要があり、それは本論文の範囲を遙かに超えるテーマとなる。本論文はそのための序論的考察にとどまるものであり、次のような内容について議論が行われる。まず、第二章では、西洋哲学の歴史的展開の中で、宗教哲学がいかなる仕方で存在してきたかを略述し、宗教哲学の輪郭を確認する。続く第三章では、宗教哲学

の構築を試みる際に問われるべきいくつかの問題が指摘される。そして最後の第四章において、序論的考察によって可能になった宗教哲学構築の展望について若干の考察を追加することによって、本論文を締めくくることにしたい。

二　宗教哲学の広がりとその輪郭

西洋哲学の古代から現代までの長い歴史において、そもそも宗教哲学とは何であったのか。過去の宗教哲学を振り返ることは、今後構築が期待される宗教哲学について、その輪郭を描く際の基礎的な作業となる。

まず、宗教哲学について、広義と狭義の二つの意味を区別するところから議論を始めよう。というのも、宗教哲学は、一方では「宗教の哲学」の総体という意味で、つまり、宗教に関わる哲学的思惟のすべてを包括するものとして解釈できるが、しかし他方、キリスト教神学から独立した哲学的思索という歴史的により限定された意味においても解釈可能であって――この二つの解釈はそれぞれ根拠を有する――、この二つの理解は相互に区別する必要があるからである。前者の解釈は、広義の意味における宗教哲学というべきものであるが、この広義の宗教哲学は西洋哲学の原点である古代ギリシャ哲学においてすでに見いだすことができる。波多野精一は、『西洋宗教思想史（希臘の巻）』）において、(7) アテナイ文化における新しい哲学の展開の中に、哲学における宗教の本格的な主題化を指摘している。それは、精神的文化的生活の中心が詩人から哲学へ移行し、哲学的思索が人間の生（人生）と自覚的に取り組むようになった点に現れている。

「今や哲学者たちは、人生の意義と目的を解明し、理想を建設し、価値を創造するを、わが任務として自覚するに至り」、「国民の精神的教導者であるという特権は詩人たちよりして彼らの手に移った。」（波多野、1921、114）

この古代ギリシャ哲学における宗教の主題化以降、哲学的思索は常に何らの仕方で宗教的テーマに関わってきたのであり、その意味で、哲学は宗教哲学を包括し、あるいは宗教哲学を思索の頂点としてきたと言わねばならない。キリスト教思想との関わりという点で注目すべき最初期の宗教哲学としては、まずプラトンとアリストテレスの哲学的思惟を挙げるべきであるが、ここでは、プラトン哲学が、まさに宗教哲学というべき内実を有しており、キリスト教思想における哲学と神学という問題領域と深く関わっている点についてのみ確認しておきたい。(8)

キリスト教思想における哲学と神学との関わりを考える場合、「自然神学」は特徴的な問題領域として位置づけることができる。(9)「自然神学」は、一方でその「神学」という名称から予想されるように、啓示神学と対を成すものとしてキリスト教神学に接続されるが、しかし他方、それは人間の「自然」的理性によって構築された学科であって、しばしば、神学というよりも、宗教哲学と解すべきとの議論がなされてきた。さらに、こうした自然神学は、キリスト教思想が生み出したものではなく、古代ギリシャ哲学の中にその誕生を確認すべきなのである。(10) 以下に引用するプラトンの『法律』の議論は、プラトンの自然神学の核心部分というべきものであり、ここに、プラトンの宗教哲学を確認することができる(11)――キリスト教思想はこのギリシャ的自然神学を継承しそれによってキリス

ト教固有の学問として神学を構築した[12]――。

「自分自身で動かす動は、すべての運動変化の始原として、静止しているもののなかにおいては最初に生じてくるものであり、運動変化しているもののなかでは第一番目のものであるから、その動こそが必然的に、あらゆる運動変化のなかでは最も古くて最も強力なものである、ということになるでしょう」(895B)
「『魂』という名前をもつもの、それの定義」「『自分で自分を動かすことのできる動』」(895D)、「魂がすべてのものにとって、あらゆる変化や運動の原因であること」(896B)
「動いているものにはすべて魂が宿っていて、これを統轄しているのだとすると、魂は天をも統轄していると言わざるをえないではありませんか」(896E)、「もし天と天のなかに存在するすべてのものとの軌道や運行全体が『知性』の運動や回転や計算と同様な性質のものであって、それと類似した仕かたで行なわれているのであれば、その場合には明らかに、最善の魂が宇宙全体を配慮していて、そしていま言われたような[知性が運動するのと同様な]軌道にそって、宇宙全体を導いているのだと言わなければなりません」(897C)
「それらはあらゆる徳をそなえた善い魂なのであるから、これらの魂は神であると、わたしたちは言うことになるでしょう」(899B)

このプラトンの議論は、キリスト教的自然神学（＝宗教哲学）の源泉と解すべきものであって、このように、宗教哲学は哲学の誕生の時点にまで遡り、その後の哲学史の展開過程の中で、さまざまな思索を生み出してきたのである。しかし同時に、宗教哲学はより限定的な意味で使用することができる。先に述べた、キリスト教神学から独立した哲学的思索という歴史的に限定された意味における宗教哲学であり、「吾々は、宗教哲学が学問として成り立った始めを、カントに置くことを適当と考える」という西谷啓治（「宗教哲学――研究入門」）の議論が示す通りである。[13]

近代西洋において、「理性の立場を突破して信仰の立場を確立しようとする動き」と「信仰の立場を理性の立場から否定しようとする動き」の両方を含み、その中間の「理性の立場を媒介として信仰の内容を新しく解し直そうとする立場」を軸として宗教哲学は形成されることになったのであり、「この立場が自覚的に確立されたのは、カントの批判哲学によってであった」(西谷、1949、139)。そして、「勝義における宗教哲学の祖と見なされる人はシュライエルマッヘルである」、「シュライエルマッヘルに到って、初めて宗教が人間の体験のうちで道徳とも形而上学とも異った独自の領域をもつということを、積極的に明かにしようとする企がなされた。」(同書、144)

この西谷啓治の議論は、典型的な狭義の宗教哲学理解であって、多くの論者において共有されたものである。[14] 以上の広義と狭義の二つの宗教哲学理解について、この区別を確認した上で、さらに考察を加えておきたい。以上の広義と狭義の区別にもかかわらず、これら二つの宗教哲学理解には、そこに共通するものとして、宗教哲学と人間論との関わりが指摘されねばならない。すでに見たように、波多野は、古代ギリシャ哲学における宗教の主題化（＝広義の宗教哲学の成立）を、人間の生（人生）に対する自覚的な取り組み

と結びつけていた。また、狭義の宗教哲学の発端と言えるカントの特徴を、パネンベルクは「人間学的転回」として、つまり哲学的思惟の中心が人間に移った点に見いだしている。[15] これらの議論が妥当なものであるとすれば、広義と狭義の宗教哲学とは、哲学的思惟における自覚的な人間論（哲学的人間学）に関係づけられると解することができるであろう。プラトンにおける広義の宗教哲学の人間学が形而上学的であったのに対して、狭義の宗教哲学の人間学は、伝統的な形而上学に対するカントの批判を経たものなのである。[16] いずれにせよ、宗教哲学の基盤が人間学と関わることは今後の考察にとって、重要なポイントとなるであろう。

次に、以上の広義と狭義の宗教哲学の議論を、宗教哲学の普遍性と特殊性の問題へ展開してみたい。広義の宗教哲学という理解が成り立つとすれば、宗教哲学は哲学的思惟と同じ広がりを有することになり、宗教哲学は哲学の普遍性と同じ意味で普遍的であると言わねばならないであろう――狭義の宗教哲学という観点からはどうなるだろうか――。哲学的という水準に達した思索は、古今東西のいずれにおいても、それぞれの仕方において自らの宗教哲学を有していることになる[17] ――少なくとも可能性においては――。

しかし、この宗教哲学の普遍性の議論は、それだけでは、具体的な宗教哲学構築の課題の遂行にとって、あまりにも一般的で抽象的であると言わねばならない。本格的な議論を行うには、「普遍性」についての考察を深めることが必要になるが、ここでは、普遍性の議論に具体性を付与するには、いったん特殊性の議論を経由することが有益である点に注目することにしよう。[18] 宗教哲学は可能性としては哲学的思惟一般において問い得るものであるとしても、古典期のドイツ哲学（カントからドイツ観念論）において特殊ではあるが、まさに優れた意味で具体化された。このことを念頭におくならば、近代以降の宗教哲学に関しては、ドイツ語圏と並立する仕方で、たとえば、英語圏、フランス語圏、そして日本語圏などにおける宗教哲学の特質・動向を分析することも有意義な作業となるのではないだろうか――本論文が課題とする「現代日本における宗教哲学の構築」のためには――。

こうした観点から興味深いのは、英語圏の宗教哲学である。英語圏の思想的伝統としては、近代初頭からの理神論と自然神学、あるいは経験論、分析哲学、プラグマティズムといった諸思想を挙げることが可能であるが、これらは、英語圏の宗教哲学にさまざまに反映されている。たとえば、ジョン・ヒックの『宗教の哲学』はその典型例と言えるであろう[19] ――それは英語圏における宗教哲学の優れた教科書である――。

まず、内容的に目立つのは、西洋の伝統的な神概念、神の存在論証、悪の問題、啓示と信仰、という一連のテーマである（第１章から第５章）。これは、英語圏の宗教哲学が、西洋のキリスト教的伝統、特にその自然神学の伝統との明確な連続性を有することを意味しており、こうしたキリスト教神学との接点は、フランス語圏やドイツ語圏における宗教哲学においてはやや希薄である。欧米の思想的伝統といっても、このように英語圏の宗教哲学については隣接の言語圏のそれと異なった特徴がはっきり確認できる。[20] 続く、信念の証拠と基礎付け主義、宗教言語論、検証の問題（第６章から第８章）には、経験論と分析哲学という英語圏の哲学的伝統が反映されており、これは宗教哲学を現代の科学哲学を参照しつつ構築しようとする際に――宗教哲学は宗教研究の基礎論という役割をもつ――、重要なポイントとなる部分である。そして、異なった諸宗教の真理論と人間論（死後

の問題）を扱った、第 9 章から第 11 章には、ヒックの宗教哲学の特徴とも言える宗教的多元性への関心が反映されている。

英語圏の宗教哲学は、伝統的なキリスト教思想と緊密な関連性において存立し、そこにおいてまさに自然神学は哲学と神学の媒介項（「と」）として機能しており、宗教哲学は、しばしば哲学的神学と重なり合っている。[21] しかし、さらに注目すべきは、欧米の総合大学における神学の動向であり、英語圏にかぎらず、キリスト教神学は、神学の学問性という観点から、宗教学との関連を意識した展開が試みられており、[22] その点で、英語圏の宗教哲学的伝統は参考にすべきものと言えよう。

三　宗教哲学の基礎をめぐって

四　展望

・・・

狭義の宗教哲学が誕生した時代は、啓蒙的近代・西欧的近代の確立期であり、当時の社会構造は、政教分離モデル（宗教を原因とした公共圏内の分裂・対立の解消）と欧米的価値による一元的な公共圏構想によって特徴付けられる方向に動いていた。前者の啓蒙的社会モデルからは、公共圏からの宗教の排除（＝私的事柄としての宗教）あるいは社会の世俗化（「宗教と文化」の二分法的理解）が帰結し、この社会構造が現在に至るまで、西欧的近代の理念に従った社会を規定している。この近代的モデルが未だ支配的であるとはいえ、20 世紀を通じて、時代の動向は、いわゆる「ポスト近代」という状況へと確実に動きつつあることも否定できない。二つの世界大戦（欧米的価値に基づく公共性はこれらの戦争を回避できなかった）と民族自決、グローバル化の進展による多元性の進展は、啓蒙的な一元論的な公共理解から多元性の適切な理解に立った公共論（齋藤純一『公共性』岩波書店、2000 年）への転換を促し、それは「宗教と文化」の二元論に対して「多元的な宗教文化」論へと向かう宗教理論（土屋博『宗教文化論の地平――日本社会におけるキリスト教の可能性』北海道大学出版会、2013 年）の構築を求めている。以上が、現代の宗教理解を方向付ける動きであって、現代日本において宗教哲学の構築しようとする試みにはこの動向との積極的関わりを模索することが求められると言わねばならない。そのために参照されるべき思想家としてモルトマンとハーバーマスが位置づけられるのである。

まず、モルトマンであるが、ユルゲン・モルトマンは、1960 年代以降の現代神学を代表するドイツ・プロテスタント神学者（組織神学）である。[33]『希望の神学』（1964 年）からはじまる前期の思索では、マルクス主義との対話や政治神学の構築、エキュメニズムへの関与などが特徴的であったのに対して、『三位一体と神の国』（1980 年）から後期の思索では、エコロジーとフェミニズムの議論が前面に現れている。しかし、全体として、世俗的な思想から世界の諸宗教まで幅広い他者との対話を推進し、現代社会の実践的な課題に積極的に関与する点で、モルトマンの姿勢は一貫している。こうしたモルトマン神学の全体の動きは、『神学的思考の諸経験』（1999 年）や自伝『わが足を広きところに――モルトマン自伝』（2006 年）から明確に知ることができるが、ここでは森田雄三郎「現代神学の動向」（1987 年）におけるモルトマン神学に対する論評を引用しておきたい。[34]

「モルトマンの最初の三部作『希望の神学』、『十字架につけられた神』（一九七二年）、『霊

の力における教会』（一九七五年）を読むとき、われわれはブロッホのみならず（たとい多くの言及がなされずとも）アドルノ、ハバーマスといったフランクフルト学派のいわゆる『批判的理論』の社会哲学の主張がいたるところで考慮されていることに気づくことであろう。しかし、この三部作は、その後に出版された『三一神と神の国』（一九八〇年）によれば、なおプログラム提出にすぎず、本格的な方法論に基づいた神学的反省は『三一神と神の国』にはじまることを、モルトマン自身が表明している。この書物以後の彼の著作を見るとき、直ちに気づく新しい特色は、彼がエコロジーの神学を唱える米国のプロセス神学にかなりの接近を示している点である。したがって、ごく最近のモルトマンの神学的動向が、エコロジー的関心と、終末論的な社会行動理論とを、どのように総合するかが、彼を理解する上の一つの重要な焦点をなすとも言えよう。」（森田、1987、41-42）

このように、モルトマン神学の展開の中に、近代的知と宗教との対立（宗教批判）そして宗教多元性という現代の思想状況に対するキリスト教神学の側からの積極的な取り組みを確認することができる。しかし、近代的知と宗教との対立を乗り越えるには、神学の側からの動きだけでは不十分であり、近代的知の立場、たとえば哲学の側からの動きが必要となる。その点で、興味深いのは、21 世紀に入ってからのユルゲン・ハーバーマスの動向である。[35]

ハーバーマスは、フランクフルト学派第二世代の哲学者であり、啓蒙的近代あるいはカント主義の伝統に明確に立ちつつ、公共論・コミュニケーション論において先駆的な役割を果たしてきた。従来ハーバーマスは、公共圏の議論との関連においては宗教についてほとんど語ることがなく、近代の問題は世俗的な領域でのみ論じるという態度を取ってきた。

「政治的リベラリズム（私はこの政治的リベラリズムの特定の形態であるカント的な共和主義を擁護しようとしているのだが）の骨子は、民主的立憲国家の規範的基盤を非宗教的かつポスト形而上学的に正当化しようとするところにある。」（ハーバーマス、2007、4）

しかし、21 世紀に入り、ハーバーマスは時代状況を「ポスト世俗化時代」と認識した上で、宗教的伝統に対する従来のスタンスを確実に転換しつつあることがわかる。[36] それは、政治的リベラリズムの正当化には非宗教的な仕方で十分であるという点では従来通りであるが、しかし、そこには「モティベーションという点ではたしかに疑念が残る」（同書、8）という指摘が含まれていることである。

「国家公民は、自分たちのコミュニケーション権利および参加権をアクティブに行使しなければならない」が、これには「相当に高度のモティベーションの投入を要求される」、「シヴィル・ソサイエティは」「『政治以前の』生き生きとした源泉からそのエネルギーを得ている。」（同書、9）

これは、現代社会が直面する「国家公民の私生活中心主義」「市民たちの脱政治化」に対して民主主義を擁護するには、「統合的紐帯」「憲法愛国心」といったものが必要であり、その点で、「哲学は、宗教的伝統に対して、学ぶ姿勢を持ち続けねばならない」（同書、17）

との見解にほかならない。その上でハーバーマスは、ポスト世俗化時代における哲学の宗教に対する新しい関係性について、宗教的知と世俗的知との相互の学び合い――二重で相互補完的な学習過程――と、宗教言語から公共言語への翻訳という課題を提起するのである。

「世俗知の側も、宗教的な確信には認識としてのステータスがあり、それはまったく非合理的であるなどとは言えないことを認めねばならない」（同書、22）、「信仰を持った市民たちが公共の問題に対して彼らの宗教的な言語で議論を提供する権利を否定してはならない。」（同書、24）

もちろん、この学び合いには、次の条件が課せられる。つまり、「誰にでもわかる言葉づかい」（ハーバーマス、2014a、28）という条件であり、「リベラルな文化は、宗教的な言語でなされた重要な議論を公共の誰でも分かる言語に翻訳する努力に世俗化された市民たちが参加することを、期待していいのである」（ハーバーマス、2007、24）。これに関しては、宗教的な言語に対する公共言語とは具体的に何であるのか、それは単一なのか、あるいは多元的であることが認められるのか、また翻訳は宗教から世俗へと一方向的なものなのか、など、今後追求されるべき問題点も少なくない。しかし、ハーバーマスにおける以上の立場の転換は、宗教哲学の観点からも注目すべきものであることは疑い得ない。[37]

現代の宗教哲学を構想する場合に、モルトマンとハーバーマスにおいて確認できる知的状況の変化は重要な意味をもつように思われる。それは、「有神論対無神論」、「キリスト教対マルクス主義」といった対立図式はもはやその妥当性を大幅に喪失しつつあるということであり、さらに「宗教対科学」、「キリスト教対仏教」といった従来の議論の構図についても、見直しを要求するものとなるかもしれない。現代の思想状況から展望できる一つの方向性は、対話・コミュニケーションにおける「多元性と合意」（多元的公共性）の具体化であり、その理論的な掘り下げには哲学的な思索が不可欠である。ここに現代における宗教哲学が取り組むべき課題が存在するのではないだろうか。